

# 松代藩第六代藩主真田幸弘点取俳諧『きく島』の紹介と翻刻(1) On "Kikubatake" by Yukihiro Sanada, 6th Load of Matsushiro Domain (1)

平林香織 Kaori Hirabayashi, 小幡 伍 Atsumu Obata, 玉城司 Tsukasa Tamaki

## はじめに

松代藩十萬石第六代藩主真田幸弘(元文五年(一七四〇)～文化一二年(一八一五)七六歳。俳号菊貫・白日庵他。以下俳号により菊貫と記す)は、漢籍、和歌、俳諧、紀行、書画に分類される膨大な文芸資料を残している。中でも、『菊の分根』または『菊島』と名付けられた一七〇点を超える点取俳諧資料は、九百巻九万句に及ぶ。明和九年(安永元年)(一七七二)の『菊の分根』一冊一六巻から、文化一一年(一八一四)中の『菊はたけ』四冊二一巻までのものが現存し、平均すれば、年に二〇回以上の点取俳諧を興行していたことになる。点者には江戸座の俳諧宗匠のほか、文化年間には雪中庵完来など雪中庵系俳人も加わり、点者が百韻につき百名にのぼる巻もある。なお、菊貫は、明和・安永期ころ、高太初や大島蓼太にも師事しており、蓼太が裏書をした文台が、松代文化施設管理事務所(真田宝物館)に伝来する<sup>1)</sup>。

その治世は、宝暦二年(一七五二、一三歳)から、寛政十年(一七九八、五九歳)までの四六年間に及ぶ。藩主の座についてすぐに恩田木工民親を勝手方家老に登用、恩田木工は、役人の不正を正し、儉約に努め、藩政を刷新した(宝暦改革)と言われている。菊貫は、儒学者菊池南陽を松代に招聘し、藩士の教育活動に力を入れた。また、和歌を賀茂真淵に学び、真淵の弟子大村光枝を京都から松代に招いている。真田昌幸・信幸・幸村以来「武の真田」として名を馳せた真田家であるが、菊貫の事績は「文の真田」としても面目躍如たるものである。

菊貫の文芸資料については、早く福井久蔵によって、「一卷に収むるものみにもその数すくなくならず、その全部に於ては甚大の数に上る」こと、また、「当時名たゝる俳師」「諸侯」が一座していることが紹介されている(『諸大名の学問と文芸』昭和一二年五月、厚生閣)。本格的な紹介としては、俳諧紀行を翻刻した玉城司・伊藤善隆の「翻刻 菊貫著『旅つゞら』」(『研究と評論』56号 平成一一年六月)、「翻刻 青葉陰」『研究と評論』59

号 平成一二年一月)がある。その後井上敏幸・西田耕三らが、平成一七年から科学研究(基盤研究B)「近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究」(課題研究番号17320040 研究代表者井上敏幸)を実施し、菊貫の年賀集を雑誌『松代』17号(平成一五年三月)～21号(平成一九年三月)に五年間継続して掲載した<sup>2)</sup>。なお、井上らの科学研究の成果は『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究 論文編・資料編 第一部』(平成二十年三月)にまとめられている。

以上のような研究成果に基づき、筆者らは点取俳諧資料を調査・研究の対象として、同時代の真田家文書『御側御納戸日記』等との連関を視野に入れつつ、新たに科学研究(基盤研究C)「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」(課題研究番号22520252 研究代表者玉城司)を開始した。

本稿は、その端緒として、松代文化施設管理事務所(真田宝物館)収蔵の『菊島』を翻刻するものである。目録番号4/1/1の『菊島』(四冊)享和元年(一八〇〇)～三年(一八〇二)に巻かれた二七巻二七〇〇句である。紙数の関係でここに第一冊九〇〇韻のうち第五までを翻刻する。

(注1) 文台の裏書は次の通り。

松代の君昇進させ給ふ折から飛田の国の人より贈たる一位のときにめでたければ発句得て祝し奉けるを頓て御もの数寄の文台に造らせ給ひてうら書きせよとあふせ事のありければ

おもしろきはつ日やこゝを位山 蓼太

(注2) 菊貫の俳諧一枚摺に関するものには、雲英末雄「俳諧一枚摺について」(『真田菊貫の俳諧一枚摺』(『書誌学大系84俳書の世界』平成一一年、青裳堂)、雲英末雄監修『俳諧一枚摺の世界』(平成一一年、早稲田大学文学部)、玉城司「真田幸弘の俳諧一枚摺」(『江戸文学』25号、平成一四年六月)がある。井上敏幸「翻刻 ちかのうら」(『松代』16号、平成一五年三月)は菊貫の追悼句集の紹介・翻刻を行ったもの。

翻刻『きく島』

【書誌】(『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文  
及び諸芸に関する研究 資料編第二部』(平成二十年三月)  
による。)

真田宝物館整理番号・題名 4・1・1・1・1・きく島

書型・装幀・料紙 大本 縦二六・九糎、横一八・六糎 袋  
綴 楮紙  
表紙・題簽 砥粉色無地 原書題簽、左肩無辺打雲「享和元  
酉同二戌きく島 他連 乾」  
料紙・丁数・行数 本文共紙 全91丁墨付91丁 7〜8行

【凡例】 1 旧漢字・異体字は主旨原本の

通りとした。

2 朱書はゴシック体で記した。

3 判読不能箇所は□で表した。

4・1・1

享和

酉戌亥

きくはたけ 他連 四卷「秩題被

享和酉戌亥

菊島 四卷」付箋

4・1・1・1

享和元酉同二戌 他連

きく島 乾」表紙

百員 子鷹 陸馬 冬映 得器 双鳧

佛外 石鯨 吾山 崑山 為大

百員 娠水子 涼山子 素外 李岱 陸馬

百員 娠水子 涼山子 得器 得友 立志

百員 娠水子 涼山子 得器 得友 立志

素丸子 霞外子 左籐 古梁 器観

百員 鶯嬌子 卮言子 紫鳳 冬映 退住

百員 錦車子 仙娥子 子鷹 樗雲 隻鳧

甲長子 龜文字 富屋 莪堂 秀仙

珠成子 甘棠子 百珉 沾山 兌堂

石鯨 為大 陸馬 佛外 吾山」1才

百員 環川子 冬英 陸馬

百員 如柳 花篋 徒柔 儿友 一漁

崑山 陸馬 石鯨 得器 立志

百員 雀山子 冬央子 龜文字 陸馬 為大

升来子 雀媛子 宝井 冬映 石鯨

百員 子鷹 李岱 百珉 隻鳧 未明

東寓 春色 兌堂 崑山 紀逸

為大 陸馬 佛外 富屋 百化」1ウ

陸馬 冬映

壬正月廿五日 青山持子鷹

得器 双鳧

俳諧連哥百行 催主 青山

石鯨 崑山

南部坂持 佛外 吾山 為大」2才

子鷹兌堂陸馬隻鳧得器石鯨佛外崑山吾山為大」

付箋

家ちかく鳴立つ

雉や朝のほと

(点判読不能) 2ウ

堰の草に余る雪解

二一一一一三一一一一

長閑なる空に遠路誘れて

一一一一一一一一一一

先かひやりぬ写書もの

一一一一一一一一一一

見晴の高き所の風の尚

一一一一一一一一一一

久しき沙汰の新地開発

一一一一一一一一一一

暮の月困爐裏に渋茶ことくと

一一一一一一一一一一

飛て竈馬の髭の長さよ」3才

ウ

七五一一七七七十三七五七

油絵の形もありし葉鶏頭

一一五七二一一五五一一

月代も刺る醫師の惟光

九五五五五五二五七一一

衣／＼のわけてつれなき旭影

一一一一一一一一一一

浮名包めと舩も出て行

一一一一十五一一七二三

蜀魂聞た咄の耳と口

一一五七一五一一一一

座頭の取てまはず別荘

一一七七三二五五一一五五

素機嫌の内に見置床飾

馬隠」3ウ





崑山 四十二点子絃	三十四、蘆風	11才	一三五七一五三十五五七	よい器量誉れは白眼かへされて鶴媛
吾山 四十三点午睡	三十九、三樂		一三五七七五十七十七	衆道も武備も流行御家中
為大 四十五点馬隠	三十八、午睡		一五三〇一七八一七一十五七	虚無僧の姿には似ぬなまり言
亥閏正月	三十八、雲牙	11ウ	一五一一一三一五一十七	于麿かざる石町の鐘
升来子持	素外		一五一一一七一三一一一	さはつたら手のきれそふな初松魚
振水子	得器		一三三七三一一三一一一	元気の汗を拭ふ福から
凉山子	李岱		一三五七七一三一二七	木寄した日に木曾山の咄して
百行稿	月花折二点増		一三五七七一三一一一	櫻のうちにはなまくさい寺
廿方持	甘棠子	兌堂	一五五一一七一一一一十三	朝夕は春の扇をわすれかち
甲長子	陸馬	為大	一五一一一五一五三七七	蠶にこまる巡見の宿
二月四日満尾	催主白日菴	12才	一五一一一五一五三七七	朧月雨にやならんあたゝかさ
(白紙) 12ウ				活る火入の火加減か傳
旅の氣になりすましたる霞かな				二ウ
今をさかりに咲る菜の花				一七七十五一十五七五五
春の雨煙艸のしめり加減まで				楽寝にも母は身延を後にせず
調法からるゝ小細工の好き				一十五一一一五五一一一
此度は打て替たる住居かえ				勘当の場で機を裁切る
犬の覚のよきに感ずる				油壺さけてふら／＼戻り牛
二人寄みたり集る月の友				
秋かせふくむふみの讀さし	13才			
甘棠子 甲長子 兌堂 陸馬 為大 升来				
子振水子 持涼山子 素外 得器 古梁李				
岱 付箋				
ウ				
七一一三五一一一一二五				
呉竹に斟酌らしきわたり鳥	素文			
一三五七一五三十五五七				
笑ひにたこの入りし新造	素飛			
一五三七七五十七十七				
恥しき坐頭に年をあてられて	升来			
一五三〇一七八一七一十五七				
雪をさかなに酒酒をのみ	菊貫			
一五一一一七一三一一一				
真先へ才藏市の大べざい	雲牙			
一五一一一七一三一一一				
財布ほといて届状出す	牛如			
一五七七一三一二七				
遊ひ入る子に居風炉を水にして	梅足	13ウ		
一五一一一七一三一一一				
夢話行しやう釣された亀	馬隠			
一五五一一七一一一一十三				
靈宝に変して讀ぬ万狐の手	太路			
一五一一一七一一一一十三				
起／＼の目に月の涼しき	霍媛			
一五一一一七一一一一十三				
もの思ひしこきたらりと立姿	全			
一三七三五一一一三				
能もあしくも仲人の瓣	素文			
一五一一一七一一一一十三				
天晴と花の主しの誉て行	全			
一五一一一七一一一一十三				
永き日を知る外繫の馬	升来	14才		
一五一一一七一一一一十三				
油ても流れそうなる春の川	升来			
一五一一一七一一一一十三				
女の上戸こひの安賣	素飛			
一五一一一七一三三三五				
よい器量誉れは白眼かへされて鶴媛				
一三十三一十五一七三一五一				
衆道も武備も流行御家中	菊貫			
一五一一一七一五七五				
虚無僧の姿には似ぬなまり言	梅足			
一五一一一七一五七五				
于麿かざる石町の鐘	雲牙			
一五一一一七一五七五				
さはつたら手のきれそふな初松魚	太路	14ウ		
一三三七三一一三一一一				
元気の汗を拭ふ福から	馬隠			
一三五七七一三一二七				
木寄した日に木曾山の咄して	牛如			
一五五一一七一一一一十三				
櫻のうちにはなまくさい寺	梅足			
一五一一一七一一一一十三				
朝夕は春の扇をわすれかち	雲牙			
一五一一一七一一一一十三				
蠶にこまる巡見の宿	牛如			
一五一一一七一一一一十三				
朧月雨にやならんあたゝかさ	フ			
一五一一一七一一一一十三				
活る火入の火加減か傳	フ	15才		
一五一一一七一一一一十三				
楽寝にも母は身延を後にせず	菊貫			
一五一一一七一五五一一一				
勘当の場で機を裁切る	太路			
一五一一一七一五五一一一				
油壺さけてふら／＼戻り牛	馬隠			

十一 一七 一三一 一三三	佛法に入る大津絵の鬼	素飛	十一 一七 一三一 一三三	長普請釘の符帳も聞おほえ	牛如	十一 一七 一三一 一三三	名代の乞食縁日に来る	牛如
一一 一七 一三一 一三一	姿見にへらむ悋氣を解かゝり	素文	十五 五五 一五 五二	牡丹に甘日酒許す寺	太路	一一 一七 一三一 一三一	橋臺に渡銭の策か向ふ前	梅足 17ウ
一一 七七 七十三 七十七 七五	酔せた跡か怖い御妾	升来	五 一一 一一 一三一 一一	智恵競とふと若衆を振向せ	菊貫 16ウ	一一 一七 一三一 一三一	後の裕は風呂敷のまゝ	馬隠
一一 五三 一一 一七三 一一	釣る櫛に丈の低いを顰られて	鶴媛 15ウ	一一 七 一十五 十五 七三 一一	結句漸のかたい相ほれ	梅足	〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇	月の興手前踊に嫁も出て	牛如
一一 一一 一一 一一 一五 一一	涼敷風の真直くに来る	素飛	一七 五七 一一 一五 一一	謡まで小聲にうたふ内祝ひ	馬隠	一一 一五 一七一 一七一 一一	髪もそれから藪入の風	雲牙
五 三 一一 一一 一一 一二七	漕ぎやうの用なきそな遊山舟	升来	一一 一一 一五 一五 一七 一一	隠し藝しやと見ぬふりてミル	素文	一一 一七 一三一 一三一 一一	しつくりと咄の合し御經宗	菊貫
一一 五 一一 七七 七二 一一	揃ふ樂器の氣もあふた友	菊貫	五 三五 五七 一十五 一五 一一	慎重の温泉場帰らぬか又病ひ	鶴媛	一一 一七 一三一 一三一 一一	春もせわしく帰る後から	馬隠
三五 一一 一五 一五 一一 一一	黄金の光たふとき西東	雲牙	〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇	月かけてする菊に丹残	素飛	〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇	脇指に羽織あつけて花の山	太路
一一 五 一一 一一 一一 一一	のとかに睡気さそふ講中	フ	一一 五 一三 七 七 一五 五 九	関取のかしこまるのも只てなし	升来	〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇	八巾上る日に蝶のふはく	素飛 18才
一一 一一 一一 一一 一一 一一	あらそひの皆われかちな月と花	フ	一一 一一 一一 一一 一一 一一	いまた薄着の肌寒きころ	フ 17才	一一 一七 一三一 一三一 一一	からかへはきかぬ氣になる男の子霍媛	素文
一一 五 一一 一一 一一 一一	休さへ知れぬ春雨の日に	フ 16才	三ウ	猪牙よりも心の駒の足はやき	菊貫	一一 一七 一三一 一三一 一一	また手のほしい入梅の張物	素文
三			一 十五 十八 一七七 五七 五七	女あるしの様な別荘	梅足	一一 一七 一三一 一三一 一一	小村てもひと肌ぬきし祭前	素飛
一一 〇七 七五 五五 七七 五	手枕に肘の汚れを笑れて	升来	一 七 十五 七 一一 七 一一	掃出して四ツから過か衣かえ	雲牙	一一 一七 一三一 一三一 一一	唐音らしき生酔の弁	升来
一一 五七 三三 三三 一七八 七	酔はさつはり居續の夢	素文	一一 七 一一 一五 一十五 十五	盃らしく無い峯の松	太路	〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇	胴揚に惚人の胴は抱かねて	鶴媛
一一 一一 一一 一一 一一 一一	生霊出来不出来ある雪催ひ	素飛	一一 十五 一一 一一 一三 一一	内々て神馬に絆綱当て行	馬隠	一一 一七 一三一 一三一 一一	長くくくと振袖の欲	全
一一 一一 一一 一一 一一 一一	かまひの見ゆる衛士かたぶく	雲牙	一一 五 一一 一五 一一 一一			一一 一七 一三一 一三一 一一		

あつさりと見えし祇園の柱立 素飛「18ウ 甘棠子 四十六点 太路 三十五点 霍媛子 三十二点 素兆

一一一一一一一一三三  
竹田細工も跡は人形 素文 甲長子 五十五、太路 四十三点、牛如 四十二、公

五十五 五七 七三 五七 七七  
郭公産屋の伽の聞出して 太路 兌堂 七十二、菊貫子 四十一、升来子 四十、梅足

一一一三三三一一一一  
雨にひそく連哥初まる 雲牙 陸馬 三十九、梅足 三十八、太路 三十三、升来子「20オ

一五一一一一七一一五  
立居まで室町風の流石文 梅足 為大 六十六、公 四十六、升来子 四十五、棟足

一三一一三一一一一  
按摩の不審はれぬ加梨勒 太路 升来公持 振水子 五十四、霍媛子 四十八、升来子 二十六、公

一一一一一一一一一一  
飛石にはらりと月の露ふりて 涼山子 七十四、霍媛子 五十七、公 五十四、梅足「20ウ

一一一一一一一一一一  
國の便に添て初茸「19オ 素朴 四十一、太路 四十、升来子 三十二、霍媛子 四十、雲牙

一三五一一五 五三 五一一 十三  
相撲取秋のあはれはしらぬ也 馬隠 得器 五十六、升来子 四十八、公 三十四、公「21オ

一五五一一一七 三三五 五  
男優りの妻の鉋丁 菊貫 古梁 五十八、升来子 三十五、霍媛子 三十四、公「21オ

一五一一一三 一七八 一七七  
樽の口きるとこそやのいつも神酒 梅足 (白紙)「21ウ

一七 七 七 七 一 十三 一 十三 十三  
存在しらすの和布刈見に立 牛如 龜文持 振水子 得器

五七一十五 一一一一  
渡し守謡のやふな咄して 全 涼山子 得友 立志 左簾

一十五 一一一一 一一 二十三  
あらかやうかまし酔過に脱く笠 フ 菊貫持 素磨子 古梁 器観

一五一 一一一一 一一 二三  
いつことも限らしはなの真さかり フ 百韻 霞外子 古梁 器観

一ム 一ム 一ム 一ム 一ム  
駒鳥も雲雀もまけぬ朝起 フ「19ウ 珠成持 鶯嬌子 紫鳳 冬映 退住

三月十六日「22オ 享和元年三月十六日 誹諧之連歌「22ウ

( \* 23オより31ウまでの第三の百韻は、44オから53ウまでの第五の百韻と同一である。ただし、第五には点者として振水子が筆頭に加わっている、第五のみを掲載する )

四月九日 五月七日 満尾「頭書 錦車子 子鷹 富屋 我堂 青山持 仙娥子 樗雲 秀仙 甲長子 雙鳧 百珉 俳諧百韻 各六句言 月花折端 取句二点増 龜文子 沾山 為大 珠成子 兌堂 陸馬 催主 難歩坂持 佛外 甘棠子 石鯨 吾山「32オ (白紙)「32ウ 地謡の行義調ふ扇かな 烏帽子の影の畏き全廢 撰集の三とせは反古の山なして 遠い所も便の折く ふたつ啼よつなく守むら烏 朝にかゝりて松の杖突 はつ鮭の鱗きらめく宵の月 はや帷子の風の身にしむ「33オ □□子 蘭州子 甲長子 龜文子 珠成子

- 甘棠子 子鷹 櫻雲 双魚 富屋 莪堂  
 秀仙 百珉 治山 兎堂 石鯨 為大陸  
 馬 佛外 吾山 付箋  
 □ 五一一一七七五七七五五五五  
 五七七五  
 相撲場のまはしに秋の色見えて 菊貫  
 □ 五七一一二一一七一七七一七七一  
 七一一七七  
 片倉領にめつらしい年 馬隠  
 □ 七一一一一一一一五五一七五  
 五七五一一  
 三夫婦の諸白髪なる山深み 花足  
 □ 一五一一一一一一一一一一一一  
 一三一一五  
 娘の機の音の涼しき 大路  
 □ 五一一一一一一一一五一一一七  
 三一一七<sup>二十</sup>  
 干なから着て来る蓑に綱提て 梅足  
 □ 二一一一一一一一一八一一七一  
 一七一五  
 極樂上戸罪咎はなし 環川  
 □ 一一一一一一五五一一三一五五  
 一一一一  
 馬駕て疱瘡よけの札もらひ 雲牙 33ウ  
 □ 五十一二一二二一一一一二一五  
 五一一一一  
 阿須波の神へ初旅の幣 有斐  
 □ 五五一五五一一五五五五七十七  
 十五七一一五五  
 雪兆もなふ師走閨に梅咲て 子絃  
 □ 二七一一一一一十五一十一一一一
- 一五一一一  
 大徳の書を紅国の額 遮莫  
 □ 十五一一一一三七七七五五五  
 五一一一三  
 銀燭に狩衣の透く白拍子 柿絮  
 □ 一一一一七一一一一一一一一  
 一一一一  
 帰雁鳴行霄の月影 フ  
 □ 一一一一一一一一一一一一  
 一一一一  
 一面に花の盛の時なれや フ  
 □ 一一一一一一一一一一一一一一  
 一一一一  
 陽炎の立若艸の色 フ 34オ  
 □ 七一一七七三三五<sup>十八</sup>三五一一  
 一一一一七  
 見分シの騎射も其日の真手つかひ 如圭  
 □ 一五一一一一一一一一一一一一  
 一一一一七  
 乳人の側を逸し澤菴 芦風  
 □ 二一一一一五一一一一一一一一  
 一一一一  
 遁世の夜はからふしき旅まくら 馬隠  
 □ 七十五一一一一一一七五一一七  
 十一一一十五五  
 魚の油で奢る七里 花足  
 □ 十五五一一一一三一一七三一一  
 一一一一  
 丸山の禿美顔もよく覚え 太路  
 □ 七五一一一一一<sup>十八</sup>五五三十一七  
 五五一一一
- 下戸で難面き拳の先生 梅足  
 □ 十五一一一<sup>廿五</sup>三一一五五一一五  
 十七七七七  
 おしけなく切てくれるも牡丹好 環川 34ウ  
 □ 七十五一一一一七七七一  
<sup>二十</sup>  
 □ 五七一一五  
 百両懸た井戸に錠前 菊貫  
 □ 二一一一一一一一一一一一一  
 一一一一五  
 相場師も絶へぬ淀屋の白鼠 芦風  
 □ 二一一一十五五五五一一三七五五  
 一一一五七  
 煤掃た夜にとつさりと雪 雲牙  
<sup>二十</sup>  
 □ 五七七<sup>三</sup>三一一七七七八<sup>廿</sup>十一七十三  
 五五七五  
 看病の上手ひそかに笑はせて 梅足  
 □ 十<sup>十八</sup>一一一一七三一一七七一一  
 一七五一一三  
 三十二相似珠が疵 太路  
 □ 一一一一一一一一一一一一一一  
 一一一一  
 笙の音もなまめく斗昼の月 フ  
 □ 一一一一一一一一一一一一一一  
 七一一二一  
 山の手遠くおもひ入秋 フ 35オ  
 二ウ  
 □ 七三一一七<sup>廿</sup>二<sup>十五</sup>七七五<sup>五</sup>  
<sup>廿</sup>  
 □ 七<sup>十五</sup>十五  
 物申に菊の陰から返辭して 菊貫  
 □ 一一一一三一一一七三三<sup>十八</sup>三一









三二五二一三三三七七二二	曆の下の雨の降体	規外	一七二七五二二二二二二二二	紫衣勅許基子の傳も其序	梅足「50ウ	一一二二二二二二二二二二二	けふは誠に近來の空
一一三一一七三二五二七五十五	棟揚の差圖も吉田三位から	立葵	一一二二二二二二二二二二二	座頭の嗅て這入木屋町	一步	一一二二二二二二二二二二二	楼は花に霞まぬ四方の景
一一二二二二二二二二二二二	ふたつ取には餅よりハ是		一七二二二二二二二二二二二	寐食も忘果たる暮の敵	環川	一一二二二二二二二二二二二	壽を奉る山々の春「51ウ
一一二二二二二二二二二二二	呵つたりたましたりして針仕支環川		一一二二二二二二二二二二二	前帯にして女房ふる姫	梅足	右甲乙	
一八八七二二三三七七五二二五十三六	美人て判じもの、客分ン	亀文	一七二二二二二二二二二二二	猪牙つ、く夕なからも焔の川	珠成	一六二二二二二二二二二二二	蜃水子評 六十二点 四十五点 四十二点 亀文 菊貫 梅足
一一二二二二二二二二二二二	夕日の花になまめく其にほひ		一一二二二二二二二二二二二	しろ銀ぞくり網の洲走り	素外	一六二二二二二二二二二二二	涼山子評 九十点 五十八点 四十九点 亀文 梅足 環川
一一二二二二二二二二二二二	枸杞の芽こほす椽側の塵「50オ		一一二二二二二二二二二二二	一さしも二指も舞ふ月の興		一六二二二二二二二二二二二	素麻呂評 六十八点 四十三点 十八点 亀文 珠成 菊貫
一一二二二二二二二二二二二	ナヲ		一一二二二二二二二二二二二	絶すちらく燭臺に風「51オ		一六二二二二二二二二二二二	霞外子評 五十九点 五十五点 三十二点 珠成 亀文 菊貫
一一二二二二二二二二二二二	うなる土佐まつ治響酒の利見えて珠成		一一二二二二二二二二二二二	ナウ		一六二二二二二二二二二二二	鶯嬌子評 三十六点 三十三点 三十二点 亀文 松岡 珠成
一七二七二七二七二七二七二	孫の手染る米の一筆	菊貫	一一二二二二二二二二二二二	膝へ腰かけて居る子も大一座	亀文	一六二二二二二二二二二二二	得器評 六十四点 四十五点 三十六点 珠成 菊貫 位梅「52ウ
七二二三五五三三三三七二五一一	人も又鯨捕る家の鯛ほと	梅足	一一二二二二二二二二二二二	牽頭か寐言三弦に乗	菊貫	一六二二二二二二二二二二二	得友評 六十二点 五十点 四十点 珠成 亀文 菊貫
一一二二二二二二二二二二二	しきりに眠氣大困爐裏はた	環川	一一二二二二二二二二二二二	恋に名を知られしからに老ぬれと		一六二二二二二二二二二二二	立志評 七十三点 四十二点 三十三点 珠成 環川 亀文
三二二二二二二二二二二二二	訳もなく嘶上手の笑はせて	一步	一一二二二二二二二二二二二	世の程にくき江戸の真中	亀文	一六二二二二二二二二二二二	左簾評 六十三点 三十九点 二十六点 菊貫 珠成 立葵
一一二二二二二二二二二二二	閏月には名の付ぬ雨	松岡	一一二二二二二二二二二二二	判取を呼聲何に似たるへし		一六二二二二二二二二二二二	古梁評 五十点 二十八点 二十四点 松岡 珠成 立葵「53オ
			一一二二二二二二二二二二二			一六二二二二二二二二二二二	器觀評 五十八点 五十三点 四十五点 亀文 梅足 珠成
			一一二二二二二二二二二二二			一六二二二二二二二二二二二	紫鳳評 四十二点 三十五点 三十四点 立葵 松岡 菊貫
			一一二二二二二二二二二二二			一六二二二二二二二二二二二	冬映評 五十七点 四十三点 三十六点 亀文 素外 菊貫
			一一二二二二二二二二二二二			一六二二二二二二二二二二二	退住評 四十九点 四十八点 三十六点 菊貫 梅足 松岡「53ウ

\*本稿は、日本科学振興会の学術研究補助金による「基盤研究C」真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究（課題研究番号 22520252 研究代表者玉城司）に基づく。